

NTS物語

一、本を作り始めたころ

吉田 隆

②原点

昭和五十三(一九七八)年十一月、地下鉄丸ノ内線本郷三丁目駅前には昼食時のサラリーマンで賑わっていた。今はドトールコーヒーに衣替えした葡萄亭の看板を横目に見ながら本郷通りを春日通りに抜け、上野方面に二三分程下った一角に本郷スカイビルは建っていた。エレベーターで八階に上がると(株)フジ・テクノシステム(以下、フジテク)のプレートが目に入る。その日の面接試験が、小野介嗣という人物と私との初めての出会いだった。やがてフジテクの一員として五年間のサラリーマン生活がスタートする事になるが、それはまた私の情報・出版人生のスタートでもあった。フジテクは設立六年目、従業員は六、七名の頃で、当時は企業向け技術セミナーの開催や技術資料集の出版を手掛けるビジネスの隆盛期でもあった。小野社長はその草分け的存在の一人であり、私が彼にセミナーと出版の手ほどきを受けたことは今にして思えば幸運なことであつた。

ここで、NTSの原点とも言えるセミナービジネスの成り立ちを振り返ることにしたい。それは私がNTSを興したバックグラウンドを語るにもなるだろう。

情報そのものをセミナーや出版の形で商品化するビジネスは、その足跡を日本の高度成長とともにしている。昭和三十年代初頭、

日本が工業化の道を邁進し電気冷蔵庫、マイカー、カラーテレビが「新三種の神器」と言われた頃、大手新聞社を中心に経済セミナーという名のニュービジネスが成長しつつあつた。また昭和三十七年頃には、日本エコーミックセンター(通称エコーセン)が、土地価格の上昇による不動産景気を背景とした土地利用セミナーと、セミナー情報を本の形で集めた「情報資料集」及び雑誌「レジャー産業」の成功でセミナー情報産業の牽引車としての地位を築きつつあつた。この時期は、その後バブル崩壊まで続いたセミナー百花繚乱時代の幕開けだったのである。

その後、昭和四十年頃(株)フジ・インターナショナルという名のセミナーベンチャーで、三名の企画マンが経済セミナーを中心に活躍を始めた。技術セミナーを開催することもあつたが、それも一人の講師によるいわゆる一日ワンマンセミナーが中心で、経済セミナーの盛況とは比べ様もなかつた。昭和四十三年、そこにもう一人の企画マンが加わつた。彼はマイナーだった技術セミナーの可能性に目を向け、二日間で講師八人という独自のスタイルを確立し、その後のエンジニアリングセミナービジネスの先陣を切つた。彼は、一日ワンマンセミナーと、二日間六人セミナーとの本質的な違いをいち早く掴んでいたのである。その違いはその後、一日ワンマンセミナーを大量の顧客データのコンピュータ管理によるセミナー量産型産業へ、二日間六人セミナーはむしろ情報・出版産業への道を歩ませることになった。両者の違いについては、後々折に触れ説明をしたい。エンジニアリングセミナーの可能性を信じ、

掲示板

年末年始の予定

十二月二十八日 仕事納め
十二月二十九日～一月四日 休み
一月五日 仕事始め

社内清掃について

次の日程で、本社事務所内の床掃除を行ないますので宜しくお願い致します。当日休日出勤の予定がある場合は作業に支障がありますので、必ず総務部に連絡して下さい。

十一月二十二日(日)
十二月二十七日(日)

年末調整について

十二月二十五日と来年一月十日の給与支払い時に今年度の源泉所得税の年末調整を行います。十二月四日に年末調整用の書類の提出をお願いしますが、生命保険料などの所得控除がある場合は保険会社等から送られてくる保険料の支払い証明書を添付して下さい。また、中途採用で前職のある人は、以前の職場から支払調書の交付を受けて下さい。

新しいスタイルを確立した企画マン小野介嗣氏は、三年後の昭和四十六年に独立しフジテクを設立した。私と彼の出会いは偶然ではあるが、その出会いがなければNTSは存在しなかつただろう。そして、彼と私の企画マインドはともに日本の高度成長の幕開けという母体の中から生まれ、受け継がれたものである。

編集後記

ウルトラクイズが八年



ぶりに復活した。福田さん(総務)は第一周を突破できただろうが、先日本屋にウルトラクイズの本があつたので、懐かしさから買って来た。当時は子供だったのであまり感じなかったが、あまりにもできの悪い問題ばかりに驚いてしまった。たとえば、「水戸黄門は徳川家康の孫である。○か×か」、「飛行機にはクラクションがある。○か×か」等々。答えを見ると「えっホント?」と言っちゃうような問題ばかり。クイズを考える人はエライなと思うと同時に、世の中には知らないことが沢山あるのだと感じた。たとえそれが日々の暮らしに必要なことであつても。

本号では、初めて社外の方から原稿を頂いた。一つは竹田先生。もう一つは中山さんである。どちらも日常の暮らしには必要のない情報かもしれないが、中島君(営業)も本号の中で言っているように「知って損はない」のである。どうぞお試しあれ。

さて、何も懐かしただけでクイズの本を買つたわけではない。そう、今年もやります「湯島横断ウルトラクイズ」のためなのだ。装いも新たに、十二月十八日の忘年会で開催予定。どうぞ楽しみに。ちなみにニューヨークは行けません。あしからず。(伊)

先月号のクイズの回答

答え のど (C)
正解者 なし

NTSニュース 第五号

一九九八年十二月二十五日発行